

参考文献

- 新井健一郎. 2013. 「ディズニー化する郊外」『消費するインドネシア』, 倉沢愛子(編), 121-154 ページ所収. 東京: 慶應義塾大学出版会.
- Dielman, Marleen. 2011. *New Town Development in Indonesia: Renegotiating, Shaping and Replacing Institutions. Bijdaallandvolk Bijdragen Tot De Taal-, Land- En Volkenkunde* 167 (1): 60-85.
- Hunter, Floyd. 1953. *Community Power Structure: A Study of Decision Makers*. Chapel Hill, NC: University of North Carolina Press.
- Kusno, Abidin. 2010. *The Appearances of Memory: Mnemonic Practices of Architecture and Urban Form in Indonesia*. Durham, NC: Duke University Press.
- Rimmer, Peter James; and Dick, Howard W. 2009. *The City in Southeast Asia: Patterns, Processes and Policy*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Sassen, Saskia. 1991. *The Global City: New York, London, Tokyo*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Winarno, Bondan. 1988. *Tantangan jadi peluang: Kegagalan dan sukses pembangunan jaya selama 25 tahun*. Jakarta: Pustaka Utama Grafiti.

櫻井義秀(編著). 『タイ上座仏教と社会的包摂——ソーシャル・キャピタルとしての宗教』明石書店, 2013, 356p.

本書は、編者の櫻井義秀と、タイの開発僧や新しい仏教運動について研究を続けてきたタイ研究者四名及び北海道大学で修士号や博士号を取得した四名の研究者が執筆した九つの論文から構成される。書名が示すように、「ソーシャル・キャピタル」という概念を用い、現代タイ社会において、タイ上座仏教が新たな社会的包摂の役割を果たすことを論じたものである。

編者の櫻井は、長きにわたってタイ社会における上座仏教の貢献に関する研究を積み重ねてきた

と同時に、仏教の社会貢献という概念を社会科学的に定義することの難しさを指摘してきた。本書は、「ソーシャル・キャピタル」概念を用いて、「社会の複雑化・文化によって地域や民族の出自が異なるもの同士を結集させ、まとめてきたものが宗教により創出された新たな共同性」(p.14)であると、宗教の社会貢献をより絞り込んで考察するものである。

各論文の議論に先立って、本書が掲げた「社会的包摂」「ソーシャル・キャピタル」「タイ上座仏教」という三つのキーワードを整理しておきたい。この三つのキーワードは編者が執筆した序章と第一章において詳しく論じられている。「社会的包摂」とは、現代社会において排除されている人々を改めて社会に参加させることである。かつてタイ研究者はしばしばこの問題を〈都市—農村〉の格差という概念で説明してきた。一方、櫻井は、近年のタイ社会の再編によって、こうした二分法でとらえるのではなく連続体としてとらえるのがよりふさわしいとした(p.52)。つまり、〈都市—農村〉の格差よりも、地域や家族などの共同性を失い、多様な階層分化によって、互助共同のサポートやコミュニティを持っていない人たちが現代タイにおいて排除されているという。「社会や他者への一般的な信頼、互酬性規範、互助的ネットワークの総体を概念的に示す言葉」である「ソーシャル・キャピタル」は、前述の社会的包摂の文脈の中で重要な役割を果たすものと考えられる。さらに、本書が主たる対象とした「タイ上座仏教」は、公共宗教としてタイの政治や社会と密接に関わる一方、櫻井の表現を借りれば、「百貨店」(p.18)のように多様な宗教行為が含まれており、タイ社会における「社会的包摂」のコンテキストの中で、「ソーシャル・キャピタル」の役割も期待できる。本書の各論文は、この三つのキーワードを念頭に置いた事例の考察であると考えられることができる。以下では、この三つのキーワードに着目しながら、第二章以降の各論文について論じたい。

まず、「社会的包摂」というキーワードに関わるのは第二、三、五章の論文である。それぞれの論文は、社会の主流から排除された子どもたち、

HIV/エイズ患者、障害者を取り上げ、彼らがいかにして社会に再び包摂されるのかを論じている。

第二章の北澤泰子論文は、「生き直し学校」と「子供の村学園」の二つの NGO が設立した児童養護施設と寄宿学校を取り上げた。「生き直し学校」は麻薬や非行、家庭崩壊で学校に継続して通えない子どもたちを対象に、共同生活を通して「心の開発」を行い、彼らの新しい人生を目指す施設である。一方、「子供の村学園」は遺児や孤児、貧困、家庭崩壊、虐待が原因で社会から排除された子どもたちを対象に、自発的な学習に取り組む寄宿学校である。この二つの事例を通して、タイにおいてインフォーマル教育が社会的包摂の一端をなしている現状を描き出した。

第三章の佐々木香澄、櫻井義秀論文は、二十数年間エイズ・ホスピスを続けているプラバートナンブ寺院の事業内容と現場の状況を取り上げた。新薬開発と保健医療制度の充実によって、プラバートナンブ寺院の事業の中心は終末期ケアから慢性病に向き合っている人々のケアへと変わってきた。ここでは、死者の看取りよりも、「社会で役に立たない、要らないと思われる人たちが集まって、再び用いられるようになるコミュニティ」(p.132) という概念で、伝統的な家族やコミュニティから排除された患者たちの共同体の形成とスピリチュアルケアの回復過程を重んじている。

第五章の浦崎雅代論文は、カンボン・トーンブンヌム氏のライフヒストリーを通して、瞑想実践を障害者の生きる技法として考察した。事故に遭って障害者になったカンボン氏は、家族や親戚の身体の介護があっても、心の苦悩は解決できないという。その後、「ただ観る」という瞑想実践を通して、苦しみを克服し、さらに仏教の「善友」という概念を実践することで、開発僧や障害者たちと結びつく。この事例は、障害者は伝統的な家族などの繋がりから決して排除されてはいないものの、心のケアとして、仏教の瞑想実践を通じた新たな繋がりというソーシャル・キャピタルの形成が見られることを示している。

次に、「ソーシャル・キャピタル」を他者との繋がり、すなわち共同体やネットワークを作り出す

ことと理解する論文として、第四章と第七章がある。この二つの章では僧侶たちのネットワークと学校、仏教寺院、家庭などとの新たな繋がりを論じている。

第四章の岡部真由美論文は、国際 NGO と北タイエイズケアに携わる僧侶たちのネットワークについて考察した。国際 NGO は寺院をタイ地域コミュニティの中心をなす資源とし、地域コミュニティのソーシャル・キャピタル化を期待して僧侶のネットワーク形成を推進する。しかし現実には、他宗教との対話や、地域コミュニティの社会開発というよりも、僧侶のネットワーク形成を通して、僧侶、寺院そのものがソーシャル・キャピタル化されているのである。

第七章の矢野秀武論文は、「仏教式学校プロジェクト」と「善徳プロジェクト」の二つの宗教・教育運動を事例に新たな仏教と社会の動きを論じた。二つの運動は、「学校への注目、国王崇敬との連動、問題解決を通じた集団化」という三つの認知的な側面では、従来の仏教や国王という価値を社会秩序の基盤とする認識は変わらないものの、ソーシャル・キャピタルのネットワーク側面に新しい風を吹き込むものである。要するに、「家族や地域共同体の繋がりが揺らぎはじめている状況に危機意識を持ち、新たな形で繋がりの再構築を目指す活動」(p.257) であり、学校教育の仏教化によって、新たな「ソーシャル・キャピタル」が生まれる過程を検討した。

第九章のティラボン・クルプラントン論文は、同じくタイ仏教寺院が作ったソーシャル・キャピタルを論じているが、そのコンテクストはタイ社会ではなく、ドイツにおけるタイ人のネットワークにある。先行研究では、ドイツ国内で活動するタイ人団体が少ないために、生活上の問題を抱える在独タイ人は少数の仲間や自分の家族しか頼れないとされてきた。しかしティラボンは、本章で、近年設立されたタイ寺院により、在独タイ人のネットワークが拡大し、相互扶助的な役割が果たされていることを明らかにした。ドイツ社会に接近するところまでは踏み込んで論じられていないが、仏教寺院がタイ移民たちのソーシャル・キャピタルとして包摂されている現実がよく示されて

いる。

第六章と第八章は上で述べた三つのキーワードの論理にはいささか一致しない。強いて言うならば、三つ目のキーワードである「タイ上座仏教」の新たな役割や思想を提示したものと見える。

第六章のスチャリクル・ジュタティップ、櫻井義秀論文は、2011年の大洪水に際して、三つの寺院がとった対応の実態報告である。洪水の前と最中、そしてその後の対策と支援の実態を分析した。政府の防災・福祉機能が不十分なために、寺院が代わって地域防災・福祉の役割を果たしている一方、寺院の名声や規模などによって、支援力に差が見られる。この論文は仏教寺院が防災と復旧に果たす社会貢献を論じているが、共同体づくりの「ソーシャル・キャピタル」機能を果たすとは言い難い。興味深いのは、むしろ寺院間の格差以外に、寺院と地域住民たちの間に齟齬が見られることは、「ソーシャル・キャピタル」論がカバーできない社会の一面を示していると言えよう。

第八章の泉経武論文は、現代タイの知識人プラウエート・ワーシーがスピリチュアリティ（チットウィンヤーン）概念をタイ仏教に導入したこととそれに対する反論について論じたものである。「チットウィンヤーン」の概念はプラウエートにとって「宗教の回復」と「宗教間相互の対話」の意味が含まれているが、一方で、これは元来キリスト教の用語であり、仏教の教えが覆い隠される恐れがあると批判する立場もある。本章も前述のソーシャル・キャピタル論とはやや外れているものの、近年のタイ仏教の危機感と知識人の新たな歩みを示した。

本書は、タイ上座仏教とタイ社会の関係に加えて、これらに関する研究にも新たな視点をもたらした。まず、タイ上座仏教とタイ社会の関係について、泉論文でも言及されているように、昨今、僧侶による金銭の不正授受や猥褻行為などの報道がしばしば耳に入り、タイ上座仏教に対する不信感と危機感がますます高まっている。これに対し、本書の各論文では、事例を通してタイ上座仏教の新たな社会貢献の在り方を示すことで、改めてタイ現代社会における上座仏教の役割を問い、そし

てその可能性を提示した。

また、本書は、タイ上座仏教に関する先行研究において示されてきた都市部の新興仏教運動と農村部の開発僧運動という〈都市—農村〉の分断ではなく、現代タイ社会の再編過程で排除された人々が、さまざまな場において改めて上座仏教により社会に包摂される、という新たな視点で描いている。言い換えれば、以前の経済発展による〈都市—農村〉格差による差異という議論に代わり、エイズ患者、障害者など互助共同のサポートやコミュニティを持ちにくいことが差異として現れると論じ、現代タイ社会における新たな分断というこれまでにない視点を与えた。さらに、この新しい排除の構造において人々が社会に包摂される場面に「ソーシャル・キャピタル」という概念を導入して説明を試みたのである。

しかし、本書では、それぞれの著者の研究関心によって、各論文は異なる概念の組み合わせを重んじて書かれており、すべての論文が冒頭で論じた三つのキーワードに沿って展開するものではない。それゆえに、中心となる「ソーシャル・キャピタル」概念も時にあいまいになっており、本来社会貢献より意味を絞ったはずの「ソーシャル・キャピタル」という概念が広い意味にとどまっているケースが散見される。いくつかの章では、確かに上座仏教を通して現代社会における新たな人間関係や互助的なネットワークが発見されるものの、多くはむしろ上座仏教の役割を強調する結論を導いている。

また、「社会貢献」を強調するがゆえに、形成された人間関係やネットワークの中の人々の差異と分断に関して、さらなる分析は行われていない。例えば、ドイツのタイ寺院の例や洪水に対する各寺院の対応の例では、異なる寺院の機能、そして共同体と思われていた寺院と地域住民の間の齟齬は、より詳細に検討する余地がある。「ソーシャル・キャピタル」が社会貢献となる「良い面」とどまらず、問題点となる「悪い面」にも着目することで、現代社会における「ソーシャル・キャピタル」の全貌がより明らかになるだろう。

とはいうものの、本書の各論文は、詳細な事例の検討を通して改めて現代のタイ社会におけるタ

い上座仏教の役割や貢献を示した点において、高く評価されるべきものである。筆者はタイ宗教・社会研究の後輩として、本書から多岐にわたって多大な示唆を得た。今後も各著者の研究のさらなる展開を期待したい。

(林 育生 [LIN Yu-Sheng]・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

黄蘊 (編). 『往還する親密性と公共性——東南アジアの宗教・社会組織にみるアイデンティティと生存』 京都大学学術出版会, 2014, iii+266p.

本書は、京都大学「親密圏と公共圏の再構築をめざすアジア研究拠点」のプロジェクトの成果であり、新進の若手研究者7人による編書として、シリーズ『変容する親密圏/公共圏』の一冊を成している。

広く知られているように、公共圏を対象とする議論はハーバーマスに始まった。しかし市民による討論空間が世論を形成し、政治権力へと対抗する公共圏を形成するとの“西洋的市民”を中心とした概念は[ハーバーマス 1973]、社会的弱者を切り捨てる可能性をも孕んでいる。では、急激な近代化が推し進められる東南アジア地域において、女性や貧民など周縁化されてきた人々は、いかに生存し社会と関わっているのか。これが本書の問いである。

通常このような者たちは、私的領域である親密圏を形成し、相互扶助により生存を図るだけでなく、時に団結し公共圏に対抗すると認識されてきた。これに対し本書は、親密圏—公共圏を分けず一体のものとして捉え、共同体はその濃淡の中を変化していると言う「ベクトル論」による考察を唱える (p.4)。このような視点に基づき本書では一貫して、親密性の強い共同体が、公共性を志向し変化する過程が描かれている。共同体はいかなる時に公共性を持ち、その変化は、どのような社会状況と権力関係を示しているのか。本書は、東南アジアにおける宗教・社会組織の変化を通し、親密圏・公共圏を捉え直そうとする労作である。

本書は序章と終章の他、以下の4部7章から構成されている。

■ I 部「親密圏による公共性の構築、獲得」

第1章 「過平安橋」—— シンガポールの広場に出現するゆるやかな公共性の場 (伏木香織)

第2章 家庭内祭祀から公共領域へ—— マレーシア華人社会における「盂蘭勝会」の都市的構造 (櫻田涼子)

第3章 移民社会における「親密圏」の機能と変容—— マニラ華人社会における伝統的組織 (松嶋宣広)

■ II 部「公共性・公共圏の意図せぬ生成」

第4章 民衆が創出する都市の親密性と公共性—— ベトナム・ハノイの宗教施設「ハビ亭」と同郷会 (長坂康代)

第5章 スピリチュアリティの親密圏から公共性へ—— イスラーム世界マレーシアの「仏教公共圏」 (黄蘊)

■ III 部「地域社会の親密性・公共性に通時的にかかわる『伝統的な力』」

第6章 親密性・公共性の変容と伝統的な力—— 北タイ・チェンマイの霊媒術を手がかりに (福浦一男)

■ IV 部「複数の公共圏の競合とその中での往来」

第7章 貧者にとっての親密圏と公共圏—— マニラ首都圏における露天商組織の連帯と抵抗 (日下 渉)

I部の1-3章では、シンガポール・マレーシア・フィリピンの華人共同体が分析される。従来、同郷・同業者組合として閉鎖性が強調されてきた華人共同体であるが、近代化に伴い存続が危ぶまれるようになっていく。彼らは、いかなる生存戦略の下で組織を維持しようとしているのか。これがI部の問いとなっている。まず第1章ではシンガポールを舞台として、霊媒集団が組織する宗教儀礼が分析される。この儀礼は新聞で告知された後に駅前広場で催されるため、不特定多数の人間の参加を前提にしている。外部から参加する者の多くは、医療・年金・高齢者問題など政府が未対応の社会問題に直面しており、霊媒は彼らに精神的